

## 「昭和の東京オリンピック」

コロナ禍で来年の東京オリンピック開催が揺れている。

どうしても開催しなければならないのか疑問に感じているが、1964年の東京オリンピックを思い出してしまう。私は小学校6年生であった。

マラソンでは、ローマ大会金メダルの裸足のランナー（エチオピアのアベベ）がオリンピック2連覇のゴールをきり、日本の円谷選手はデッドヒートの末、銅メダルを獲得したのは印象深い。だが、円谷選手は次のメキシコオリンピックを前にして、自ら命を絶った。

現上皇后の美智子様のご成婚のいわゆるミッチーブーム(1950年)に乗って、全国の家庭にモノクロテレビが急速に普及し始め（普及率80%）、東京オリンピックの際にはカラーテレビへと移行し始めた。当時、モノクロテレビは国民のほとんどの家庭に普及していた（普及率95%）。

しかし、わが家にはまだテレビもなく、オリンピックのテレビ鑑賞は小学校の視聴覚教室であったと記憶している。もちろんモノクロテレビだった。

そういえば、その10年後に市川崑監督の映画『東京オリンピック』を観た。アジアで最初に開催された東京オリンピックの記録映画である。

映画は開会式や競技そのものを記録しただけにとどまらず、変貌する新宿の街並み、新幹線、そして拡張された首都高速や東名高速道路を映しだしている。つまり、映画はオリンピックのナショナリズムや感動を再現しながらも、同時にオリンピックによる「産業構造の転換」をも伝えようとしていたのではないか？。言い換えれば、国家的な大イベントのスポーツの祭典・オリンピックによって、いったい日本の何が変わったのか、そこに監督の制作意図を感じたものだ。

オリンピックは東海道新幹線を生み出し、鉄道による東京と大阪間の日帰り出張を可能にした。首都高速や東名高速道路の拡張は、産業における輸送機関を鉄道からトラックへと転換させた。二大都市は「日帰り会議機能」で結ばれ、産地と消費者は「新鮮さ」でより結ばれる結果となった。

来年の東京オリンピックで何が変わるのか？

膨大な費用が使われるが、その費用対効果を考えてしまうのは、アスリートたちに失礼だろうか？